

令和 5 年 10 月 23 日現在

機関番号：62501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00995

研究課題名(和文) 古代荘園と在地社会についての高度情報化研究

研究課題名(英文) Advanced Information Technology Research on Ancient Manors and Local Societies

研究代表者

仁藤 敦史 (NITO, ATSUSHI)

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・教授

研究者番号：30218234

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本課題は、古代荘園と在地社会の実態的分析から「日本型律令制」の理念と実態を新たな分析手法により明らかにすることを目的とした。炭素14年代分析法、高精細の顕微鏡システム、地理情報ソフトなど新たな分析手法を駆使することにより、従来の肉眼観察的な成果に比較して、より高度な分析情報を獲得できるようになり、絵図や文書の正確な読み取りが可能となった。

古代国家が荘園経営を認定する場合の法的根拠として、氏族の墓や馬を飼育する牧が根拠とされ、官符認定などが必要とされた。こうした古代荘園領有の根拠が荘園において共通していることが確認されたことも成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代と中世では異なる立場から荘園研究がなされてきたが、古代から中世へ続く荘園について連続的に位置づける研究は少なかった。さらに、従来の荘園研究では文書や絵図の肉眼観察が主流で、高度な分析手法を導入した研究も少なかった。本研究は、これらを克服する試みである。さらに、荘園の歴史的景観は日々失われつつあり、これらを記録し保存していく努力は社会的意義が大きく緊急性がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project was to clarify the idea and reality of the "Japanese-style Ritsuryo system" through the actual analysis of ancient manor houses and local society using new analytical methods. By making full use of new analytical methods such as carbon-14 dating, a high-resolution microscope system, and geographic information software, we were able to obtain more advanced analytical information and accurately read pictorial maps and documents compared to conventional naked eye observational results.

When the ancient state recognized manor management, the legal basis was based on clan tombs and horse-breeding pastures, which required official approval, etc. It is also an achievement to confirm that these grounds for manorial possession were common to all manors.

研究分野：日本古代史

キーワード：古代荘園 額田寺 栄山寺 倉院 国印 条里

1. 研究開始当初の背景

これまで古代の土地制度史や荘園史は、十分な資料が不足しているため律令法制を制度史的にのみ議論するか、わずかに残された東大寺領の北陸型荘園を古代荘園の一般類型であるとして議論することが多かった。前者はとかく実態とはかけ離れた法理念的かつ抽象的な議論に陥り、後者は開発が新しく、国家権力の介入により成立した特殊な古代荘園であることから一般化には問題が残り、現在ではいずれも方法論的に行き詰まりの感があった。

通説では国家的土地所有の最盛期と位置付けられている八世紀において、なぜ七世紀以来の王族の家産や家政機関が必ずしも解体されず、王族家産として奈良時代にも公的に認知継承されていくのかという疑問＝「問い」が端緒となり、奈良時代前後の私的土地経営の流れを再検討するという課題の解明が必要となった。

そのため本研究は、古代荘園と在地社会の実態分析から「日本型律令制」の理念と実態を、従来の肉眼観察だけによらない GIS などの新たな資料分析手法を積極的に導入することにより明らかにする。具体的には、初期荘園が「公地公民」を理念とする律令国家の変容から生まれたという通説の修正と、東大寺領北陸型荘園に片寄った資料的限界の打破を目指す。荘園立券化以前の土地利用状況を出土文字史料などにより明らかにする点も新しい試みである。

2. 研究の目的

古代資料についての資料単位の調査研究実績を踏まえ、非破壊分析や史料情報の高度情報化により、総合的な古代荘園像を描くことを目的とする。本研究の射程は、在地社会から古代荘園を見直し、律令制以前からの屯倉に代表される大土地所有と古代荘園との連続性を明らかにし、延いては「公地公民」を理念とする「日本型律令国家像」の相対化を試みる。条里坪付けごとの情報やその古代景観を明らかにでき、その景観が開発により急速に失われつつある「額田寺伽藍並条里図」や栄山寺文書および、後に摂関家領荘園に発展する寒河江荘(山形県)の開発前史を中心に分析する。

3. 研究の方法

具体的な調査は、国立歴史民俗博物館を研究のセンターとし、第一に総合的な討議および研究発表の場として位置付ける。第二に基本的な論文、史料整理、出土文字資料の発掘報告書などを対象とした収集・整理・分析する作業を研究協力者として土地制度を研究する若手研究者や大学院生に依頼しておこないデータベース化し、研究の基礎環境を整える。第三に国立歴史民俗博物館が所蔵する膨大な研究資料を調査分析する場として位置付ける。

荘園図研究の研究方向としては、第一に荘園図の詳細な観察と法量や描画過程の再現を含む資料情報提供が指摘できる。条里堺線と下絵の関係を含む絵画史料分析研究の方法の開拓が必要となる。

第二には、史料群のなかで荘園史料を位置付けることが正しい理解を導くこととなるので、分散した史料群の悉皆的調査が前提となる。

第三には荘園史料の現地調査であり、考古学・歴史地理学・民俗学などとの学際的研究体制の構築が必要となる。古代荘園図に現れる歴史的環境の開発にともなう変化消滅の危機という今日的課題への緊急的対応として現状を正確に記録することが求められており、実証的なあり方と法制史料による古代土地制度史研究との認識のズレを確認することが可能となる。

こうした研究方法に対する実践例として額田寺伽藍並条里図・栄山寺文書・東北荘園先行遺跡を大きな柱として想定している。研究成果の集約方法については、最終年度に基本資料の提供・絵図の分析・地域の概観を三本柱として構想している。

絵図釈文・額田部氏関係史料・額安寺関係史料・考古資料・論文目録などの基本資料の集成もおこなう予定である。さらに企画展示として公開することも構想している。歴史的景観の残る現地においてフィールドワークが可能である点、館蔵史料として絵図の精細な分析が期待できる点、この二点が大きなメリットと考えられる。

4. 研究成果

研究成果としては、額田寺伽藍並条里図の裏打ち紙に付着した糸片を採取し、炭素14年代分析法により、8世紀第三四半世紀までに採取されたものであることを確定させた。従来、成立年代については四百年号の時期か、宝亀年間かという議論があったが、前者の可能性が高いことが確認できた。また、高精細の顕微鏡による表面観察を行い、糸の切断状況や大和国印の押印の状況から、本来は左右に展開するものであった可能性が高まった。また、栄山寺文書については、地理情報ソフトを使用して、条里坪付け情報を入力し、地図上に表示作業をおこなった。印影調査を含む作業により、寺領の変遷を現地に即して、視覚的に捉えることが可能となった。栄山寺周辺の寺領が、北方へ拡大していく様相が確認された。

こうした新たな分析手法を駆使することにより、従来の肉眼観察的な成果に比較して、より高度な分析情報を獲得できるようになり、絵図や文書の正確な読み取りが可能となった。古代国家が荘園経営を認定する場合の法的根拠として、氏族の墓や馬を飼育する牧が根拠とされ、官符認定などが必要とされた。額田寺は、額田氏の先祖の墓を絵図に描くことで、寺の北に位置する額田部丘陵全体の占地を承認さ

れた。また、栄山寺も藤原武智麻呂の墓域が「延喜式」では東西・南北各15町という違例の広さを有していたことを根拠に、後に官符類を偽作して領有の法的根拠としていた。古代荘園領有の根拠が共通していることを確認したことも成果である。業績としては、『藤原仲麻呂』(中公新書、2021年)で仲麻呂の父武智麻呂に対する祖先顕彰および栄山寺との深いつながりを論じ、「額田寺伽藍並条里図」(『文部科学教育無通信』540、2022年)で概要を示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 仁藤敦史	4. 巻 11
2. 論文標題 天平期の疫病と風損 - 国家による対策と地域 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 静岡県地域史研究会	6. 最初と最後の頁 61-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仁藤敦史	4. 巻 224
2. 論文標題 古代公文書の成立前史 - 漢字・暦・印・文書様式 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 7-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 仁藤敦史
2. 発表標題 額田寺糸里図の研究史
3. 学会等名 国立歴史民俗博物館共同研究
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 仁藤敦史
2. 発表標題 壬生部とミヤケによる開発と渡来人
3. 学会等名 積石塚・渡来人研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 仁藤敦史
2. 発表標題 古代班科研および共同研究古代班の成果と課題
3. 学会等名 宋山寺研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 仁藤敦史	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 256
3. 書名 藤原仲麻呂	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	島津 美子 (shimazu yoshiko)		
研究協力者	服部 一隆 (hattori gazutaka)		
研究協力者	中島 皓輝 (nakazima kouki)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	公家 怜亮 (kuge reisque)		
研究協力者	石井 美恵 (ishii mie)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関